

來たるべき協働作業にむけた覚え書き

——三者への短い応答——

川 口 隆 行

くですでので記録の意味をこめて主だったものを記しておきます。

昨年の合評会において、編者や著者の意図を深いところで汲んだうえで、それぞれの立場から批評的な問題提起をしてくださった東琢磨さん、権藤泰さん、伊藤詔子さん。まずは心からお礼を申し上げます。雑誌に特集を組むにあたって、超多忙なみなさんが、当日の報告をさらに発展させた書評を頂けたことは、望外のよろこびです。『読む事典』という性格からして、書評を依頼されても大方の人は困るだろうと、人選にいささか悩みもしましが、三人にお願いしたことはやはり正解でした。そう確信するたが、三人にお願いしたことはやはり正解でした。そう確信すると同時に、合評会の際にもほんやりと認識していましたが、いままた大きな宿題を課せられた気分でもあります。

編著の刊行直後から多くの新聞や機関誌などで話題にしていただきのおかげもあってか、まずまず好調な売れ行きです。「アーカイブのアーカイブ」の必要性を東さんが言わされましたが、せつか

都立第五福竜丸展示館ニュース「福竜丸だより」（二〇一七年一月一日、*20402*）、東京新聞／中日新聞（二〇一七年一月七日夕刊、文化欄コラム「大波小波」）、中国新聞（二〇一七年一二月七日朝刊、文化欄特集記事）、西日本新聞（二〇一七年一二月一九日朝刊、文化欄特集記事）、毎日新聞（二〇一七年一月一九日朝刊、書評欄）、

図書新聞（二〇一七年一二月第三二一九号、二〇一七年下半期読者アンケート）、佐藤泉氏）、週刊読書人（二〇一七年一二月二二日、「二〇一七年回顧総特集「社会学」、好井裕明氏）、東京新聞／中日新聞

（二〇一七年一二月二十四日、「今年の三冊」、青来有一氏）、丸木美術館ニユース（二〇一八年一月一〇日、一三三号、柿木伸之氏）などですが、ほかにも沖縄タイムスや長崎新聞など幾つかの地方紙や歴史系の教育雑誌などでも紹介されました。

学会誌では『社会文学』（第四八号、二〇一八年八月）において山本昭宏さんが執筆者の立場から、『日本近代文学』（第九八集、二〇一八年五月）では私が編者としての立場から、それぞれ『読む事典』について振り返る原稿を寄せる機会に恵まれました。私の場合、原稿用紙二〇枚ほどの比較的長めの分量を割いて、構想に至る経緯、具体的な執筆や編集の過程、さらには刊行後に見えてきた課題や問題についても若干述べさせてもらいました。そこですでに書いたこととも一部重複しますが、東さん、権さん、伊藤さんの書評に対する短い応答、所感を記したいと思います。

「まえがき」でも記したことですが、そもそも「読む事典」とは、編者や執筆者が「原爆」という事象を、どのように読むのかということを提示するだけではなく、この本を手にした読者がそれぞれの立場性や主体性を問い合わせ、新たな問題領域を発見するものと考えています。「原爆」という、人によつては狭い入り口の、その先に見える光景は、実は多様な広がりをもつているのではないかでしようかと問いかけること。世界の広がりを網羅することなど到底できない非力な編者にできることは、読み手の知的好奇心を引き立てるかぎり喚起させ、新たな共同戦線を創り出すための仕掛けを埋め込むことぐらいでしよう。その点において、東さん、権さん、伊藤さんの書評は、私の期待するどおりの内容でした。

東さんは、テレビドキュメンタリーの importanceについて言わされました。今回の『読む事典』では、それでも有名な映画はどこかで言及しようと試みましたが、「原爆」や「原発」について豊富な蓄積のあるこの分野についてまったく触れることができませんでした。この点に関してはすでに執筆者では私や山本さん、それに

東さんや広島のテレビ関係者のあいだで、アーカイブの整備と読解に関する協働作業に向けた議論がスタートしています。

とはいえ、もっと大事な問題は、テレビドキュメンタリーという映像分野が欠落していることにあるのではありません。東さんの問いかけを私なりに受け止めると、たとえば「文化」「事典」を名乗りながらも、実際は日本語で書かれた狭義の「文学」が中心となつた内容であることを、いまあらためてどのように考えるべきなのかということでもあります。「文学」ではなく「文化」といつたほうが広い領域を包摂できそุดとか、「文学」を中心とする文化研究なのだとアリバイめいた説明がひとまず許されたとしても、では、「文化」とは何を意味するのか、もう少し厳密に考えたほうがよかつたですし、別の角度から言えば「原爆」に関する文化研究を通しての「文学」の再定義という課題が残されているように思います。東さんが「原爆」が「文学」を定義し直すということもありうるのではないかだろうか」という提言は、まったく納得のいくものです。

そもそも原爆文学研究会は、「原爆」にせよ「文学」にせよ「研究」にせよ、なにひとつ本質的に定まつたものはないという前提から出発しました。でもこれは、いわゆる何でもありのチャラチヤラした相対主義的思考とは一線を画します。世界の実存にアクセスすることば（あるいは表現）を互いに討議しながら探りつつ、複数の意味の場の共存（不）可能性を問題にしてきたのですから。境界の固定化や安住を戒め、未知なる領域との接続、対話をこれでもかと期待する東さんの提言は、「原爆」や「文学」、そしてもちろん「研究」についても、それらの歴史的・社会的文脈を内在的

に把握する重要性とともに、常にその外側の領野に目を向けることと、自由かつ大胆に立ち入ることを、ためらいつつも諦めないように、いつそう促してくれます。

「原爆」「文学」「研究」と隣接しつつ、もっとも緊張に満ちた領域からの発言が、権さんと伊藤さんの書評です。それは『読む事典』に直接向けられたものもあり、書評者間の相互批評ともなっています。たとえば、権さんが指摘する「被爆アーデンティティ」の構築による個別の被爆者の感情や記憶の「普遍化」「準準化」という問題について、伊藤さんも同様の問題意識を共有しているはずです。ですが、オバマスピーチにおける「hibakusha」の用法を、死者の個別性を救いだすものと伊藤さんのように評価できるのでしょうか。伊藤さんの優れたオバマスピーチ読解にならずきそうになりながらも、伊藤さんが期待するようには現在の日本社会（あるいは日本語の言説空間）ではこのスピーチが機能しないことこそが問題だと考えています。

先走る前に、権さんの指摘について言えば、正直痛いところを突かれた気がします。実は、項目を立てたときは余り意識していませんでした。が、ほぼ初稿が出揃った段階でそれを読みながら、冷戦期からポスト冷戦期、もつといえ巴〇〇年代半ばから現在に至るまでの言説の展開と変容が、全体的にうまく整理できていなかつたのですが、それを読みながら、越えるために東アジア冷戦という枠組みからアメリカやアジアの問題はできるだけ目配りをしようと試みました。英米圏の文学に詳しい人たちに入つてもらつたおかげで、それはある程度は達成できたと考えています。ただ、だからこそ余計に、アメリカ文学や環境文学の第一人者である伊藤さんからすれば、項目の立て方や記述の細部に物足りなさを感じたのも無理はないことです。

各項目の内容については執筆者に自由に書いてもらうのを原則とすると言ひながら、内容の過不足や記述の妥当性について編者としてかなり介入しました。数度に渡つて書き直しをお願いした項目もあります。一方、私自身さほど知識を持たず、勉強が足りない領域もあります。アメリカ文学や文化はその一つです。その点で、編者としての確認、介入が手薄になつた項目があることは榮蘭さんに執筆していただいた「朝鮮半島と核危機」の項目は、

初稿べ切直前に高さんと相談して、新たに項目を設定し直して、無理を承知で書いてもらいました。それでも、権さんのおっしゃるようないきれたわけではありません。今後の重たい課題の一つであります、第57回原爆文學研究会で行われるワークショップ「歴史修正主義と一九九〇年代」は、権さんが提起した課題を考える糸口になるものと考えています。また、権さんの指摘に反論というほどではありませんが、今回の編著では、主流の「原爆論」に回収されない言葉や表現を拾うということに力を傾けようとしたことだけは、強調しておきたいと思います。

否めません。これは各執筆者の責任というよりも、不案内の領域があるにもかかわらず単独で編者を務めた無謀な行為に原因がありそうです。ただし、そうしたこと以上に、伊藤さんの書評を読み直して痛切に思うのは、「日本文学あるいは日本文化研究」と、「アメリカ文学あるいはアメリカ文化研究」あるいは「日本における原爆文学研究」と「アメリカにおける核批評」といった、様々な研究制度・枠組みを超えていくための対話を積み重ねていく重要性です。

協働作業として取り組むべきことはまだまだあります。『読む事典』を手に取つてくださった読者が、そして東さん、権さん、伊藤さんの書評を読まれた読者が、新たな仲間として加わってくれることを心から望みます。またそれとは別に、個人的にはそろそろ「原爆文学」に関する二冊目の单著を準備したいと考えています。おそらく、第二部のタイトルに掲げた「表現と運動」を大きなテーマとして、戦後広島（そして長崎）に関わる「文学」、さらには「人文学」の意味を問うものになります。「出す出す詐欺」にならないようにできるだけ早く、ですがじっくりと腰をすえて励みたいと思っています。